

実践上の個別課題に応じた家庭科の授業研究

和歌山大学教育学部：山本 奈美・村田 順子・今村 律子

和歌山大学教育学部附属小学校：坂本和子 和歌山大学教育学部附属中学校：川嶋径代

那智勝浦町立那智中学校：松本年絵 智辯学園和歌山中学校：西岡真弓

岸和田市立野村中学校：中内昌恵

海南市立海南下津高等学校：尾崎京子・川南ゆかり・松浦真理子

大阪府立岸和田高等学校：宮武千波

1. はじめに

本研究課題では、各連携先の実践上の課題に応じた家庭科の授業研究に取り組み、情報共有・意見交換等の活動を通して大学教員と小・中・高等学校の家庭科担当教員の双方の立場から授業力の向上を目指している。個々の事情によって当該年度の活動には濃淡があるが、継続的な取組の中で関係性を深め、家庭科の授業について協議できる場を構築したいと考えている。以下、今年度のおもな活動内容を報告する。

2. 活動の概要

(1) 附属小学校における授業研究（和歌山大学教育学部附属小学校：坂本和子）

今年度の附属小学校では「家庭科における『探究』の姿を引き出す指導」を研究テーマとし、「探求」の手だてとして子どもたちが生活課題を自分事として捉えられるような題材の設定、題材構成、教材や指導方法の工夫等について大学教員とともに協議を重ねてきた。既習の学習内容と関連付けながら非常用持ち出し袋の見直しを行う防災学習の内容は、昨年度までに共同研究事業として取り組んできた西岡先生による中学校での授業実践にヒントを得たものである。

また、被服製作実習や調理実習の授業予定を共有し、大学教員が小学校の授業補助に入っている。大学の授業との兼ね合いで参加できる機会は限定されるが、小学校家庭科の授業の実際を把握できるよい機会となり、大学の授業にも還元できている。

(2) 高校家庭基礎における「高齢者」授業の提案－高齢者が暮らしやすい住まい・まちを題材として－（智辯学園和歌山中学校：西岡真弓）

高齢化が急速にすすむ現代において、高齢者が暮らしやすい環境を整備することや、高齢者と関わって共によりよく生きるための力をつけることは、今後ますます重要となる。一方で、高校生と高齢者との日常的な関わりは希薄になる傾向にあり、生徒の実態として高齢者のことをよく理解しない者が多いと思われる。中にはマイナスイメージしかもたない生徒もいるであろう。このような状況を踏まえて、生徒が高齢者のことを正しく理解し、高齢者にとって暮らしやすい住まいやまちを考える授業を実施することとした。高齢者にとって安全で生活しやすい住まい・まちについて主体的に学ぶことを通して、ハード面の工夫だけではなく、高齢者と共に助け合いながらよりよく生きるための工夫についても考えようとする生徒を育てたい。

今年度の取組としては、6月～11月にかけて課題とする授業内容の検討、指導計画・指導案を

作成する過程で随時、大学教員と打ち合わせを重ねて、題材名「高齢者が暮らしやすい住まい・まち」（6時間）を構想した。下表に本授業の指導計画を示す。12月～2月にかけて4クラスで授業を行っていきながら、12月2日には大学教員による授業参観の機会を得て、その後の協議をもとに授業を改善し、実践を継続中である。

表 指導計画（全6時間、1単位時間は60分）

小題材名	時間	学習内容	ねらい
1. 高齢者を理解しよう	1	高齢者の心身の特徴 高齢者疑似体験	高齢者の心身の特徴がわかり、疑似体験により高齢者の不自由さや心情を考えることができる。
2. 磯野家をリフォームしよう	1	高齢者の住生活の問題点 安全で快適な住まい	家庭内事故の現状を知り、高齢者にとって安全で快適な住まいを理解し、改善方法を工夫する。
3. 高齢者が暮らしやすいまちを提案しよう	1	グループごとの担当を決める 調査の計画を立てる	高齢者の身体的特徴や心情を考慮しながら、高齢者がより暮らしやすいまちを考えるとともに、ノーマライゼーションの考え方を理解する。
	1	調査してきた内容のグループ内発表 スライド作成についての話し合い	
	1	各自スライドの作成 グループで発表資料作成	
	1	グループ発表 ノーマライゼーションについて	

(3) 公開授業の参観および協議会への参加（海南省立海南下津高等学校）

今年度予定されていた3回の公開授業のうち、以下の2回に大学教員が参加した。

第1回：令和4年8月30日（火）5限目

食物科 第2学年

科目名 調理

単元名 植物性食品「豆類」

第2回：令和4年9月13日（火）2限目

食物科 第2学年

科目名 食品衛生

単元名 細菌性食中毒の予防

どちらも調理師免許取得に関わる科目であり、それぞれ調理と食品衛生に関する専門的な内容が扱われる中で、学習すべき内容を生徒が実感をもって理解できるよう教材や指導方法が工夫された授業であった。引き続いて行われた協議会は校内の家庭科以外の教員も参加しているため、異なる教科の視点から意見を伺うことができるのは新鮮であった。特に、日頃の生徒の様子やこれまでの指導の経緯をよく理解している立場からの意見は、その公開授業だけを切り取って参観している大学教員からは出てこない指摘であり、学習の前提となる生徒との関係づくりについて深く考えさせられるものであった。

3. おわりに

大学および連携校それぞれの事情もあり、家庭科の授業研究として統一した大きなテーマではなく、個々の課題に応じてできることに取り組んでいる実情である。すべてにおいて共同研究が十分に成立しているわけではない悩みもあるが、小・中・高等学校の先生方と協働して授業研究に取り組むことの価値に疑いはない。これからも相互に忌憚のない関係を築き、家庭科の授業について語り合える場を持ち続けていきたいと考える。